

折に触れ 四字熟語

NO. 185 『画竜点睛』 がりょう てんせい

< 意味 > 物事を完成するために、最後に加える大切な仕上げのたとえ。また、物事に最も肝要なところのたとえ。文章や話などで肝心なところに手を入れて、全体をいっそう引き立てるたとえ。一般には「画竜点睛を欠く」と用いることが多く、この場合は最後の仕上げが不十分で、肝心なところが欠けているため精彩がないことをいう。「竜を画いて睛を点ず」と訓読する。「竜」はりゅうとも読む。

< 出典 > 『歴代名画記』

< 故事 > 中国六朝時代、梁の絵の大家張僧繇が都金陵の安楽寺に四頭の竜の絵を描いたが、睛を描き入ると竜が飛び去ってしまうと言って、睛を描き入れなかった。世間の人はいこれをでたらめだとして信用せず、是非にと言って無理やり睛を描き入れさせたところ、たちまち睛を入れた二頭の竜が天に昇り、睛を入れなかった二頭はそのまま残ったという故事から。

表 言 : 画竜点睛を試みる

用 例 : 所が此の好奇心が遺憾なく満足されるべき画竜点睛の名前迄 愈 読み進んだ時、自分は突然驚いた。<夏目漱石・手紙>

語 釈 : 「睛」はひとみ・目玉。転じて、物事の大切なところの意。

一 言 : よく使ったり見かける四字熟語ですが、5月18日付けの goo 辞書四字熟語のランクでは37位になっています。

参照文献 : 岩波書店「四字熟語辞典」